

令和5年度 大田区立調布大塚小学校 自己評価 報告書

令和6年1月31日

○ 本校の概要

- ・児童数363名 主幹教諭1名、主任教諭8名、教諭9名
- ・新教科「おおたの未来づくり」新設に向けた研究実践校2年次
- ・「教えて考えさせる授業」と「探究サイクル」により単元(題材)を構成し深い学びにつなげる。
- ・「私たちが実現したい未来を考えるプロジェクト」をAARサイクルにより推進する。
- ・専門諸機関や特別支援教育コーディネーターの活用強化により特別支援教育の充実を図る。
- ・学校運営協議会と連携し地域学習パッケージを開発し、地域のために必要なことを考え行動できる力の育成を図る。
- ・地域学校協働本部(スクールサポート調布大塚)による家庭・地域力を生かした教育活動を推進する。

○ 自己評価及び学校関係者評価の結果の概要と改善策

大項目	目標	取組内容	取組指標	取組評価	目標に対する成果指標	成果評価	これまでの取組 今後の改善策	学校関係者記入欄		
								評価	人数	コメント
プラン1 未来社会を創造的に生きる子供の育成	コミュニケーション能力、情報活用能力、ともに生きる力等、これから社会の変化にしなやかに対応する子どもの力と自信を身に付けます。	外国語教育指導員を効果的に活用し、外國の方々とのコミュニケーション能力の育成等を図っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上が回答した。 2:60%以上が回答した。 1:60%未満であった。	4	協働することで考えが深まる」と回答した児童の割合	4: 67% 3: 28% 2: 5% 1: 1%	ペアやグループ学習を計画的に取り入れ、外国語教育指導員から学んだ文や単語をアウトプットする機会を設けている。引き続きしていく。 各学年で、地域や企業とのコラボ授業を行った、5年生では、大田区内の企業インフィニアムジャパンの方に、未来の自動車についてメリットデメリットを含めて考えたことを提案した。 「スクールタクト」では、共同編集のほかにグループ課題を提示できるようになり活用の場が広がった。学習のためとして3年以上はグループストライド活用している。来年度は2年生からストライドの活用を図っていく。 人権週間に校内人権作品展を行い児童保護者への啓発を行った。児童朝会での人権意識の向上を図る講話や設置した人権コーナーでの月別重点人権課題の掲載を通して啓発活動を継続する。	A B C D	9 1 0 0	・グループでの取組が増え、コミュニケーションを取るのが上手な子たちが増えているように思います。 ・目標に対する成果指標はとても高く、達成できていると思いました。体力テストの結果を踏まえた取り組み評価から課題が見えているので、これから時代を生きる子どもたちにとって体力あってのことだと思いますので、評価があがるとよいと思いました。 ・教職員の前向きな取組が感じられ、評価いたします。 ・コミュニケーション能力の高さに感心します。 ・未来社会を生きる上で基礎的な学力はもちろん、タブレット活用によるICT能力の向上とともに児童間での協働によって考えを深める取組を行っていることを評価します。
			4:全教員が行った。 3:80%以上の教員が行った。 2:60%以上の教員が行った。 1:60%未満であった。							
			4:80%以上の正規教員がChromebookに月に10日以上ログインし活用した。 3:70%以上の正規教員がChromebookに月に10日以上ログインし活用した。 2:60%以上の正規教員がChromebookに月に10日以上ログインし活用した。 1:60%未満であった。							
			4: 対象となる全学級(全教員)で行った。 3:80%以上で行った。 2:60%以上で行った。 1:60%未満であった。							
		学力の定着と学ぶ意欲の伸長を目指し、ICT機器を活用した授業を実施する。 他者の人権を尊重する人権教育の推進を目指し、人権教育資料等を活用した授業を実施する。 体力テストの結果を踏まえ体力向上全体計画を作成し、計画に基づいた体育指導や「一校一取組」運動や「一学級一実践」運動を実践する。	4:全教員で行った。 3:80%以上の教員で行った。 2:60%以上の教員で行った。 1:60%未満であった。	2	マラソン月間、縄跳び月間を設け、校内の課題である力を補った。今年度はストの体力・生活の課題を分析し、取組みを充実させ、体力の向上を図っていく。	ICT支援員を活用して、タブレットの基本的な使い方を周知した。今後は、ICT支援員と協力して来年度に向けてクラスルームやアプリの使い方について周知していく。	A B C	9 1 0	・マラソン月間、縄跳び月間を設け、校内の課題である力を補った。今年度はストの体力・生活の課題を分析し、取組みを充実させ、体力の向上を図っていく。 ・ICT支援員を活用して、タブレットの基本的な使い方を周知した。今後は、ICT支援員と協力して来年度に向けてクラスルームやアプリの使い方について周知していく。	
			4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上が回答した。 2:60%以上が回答した。 1:60%未満であった。							
			4: 対象となる全学級(全教員)で行った。 3:80%以上で行った。 2:60%以上で行った。 1:60%未満であった。							
プラン2 学力の向上	児童・生徒一人ひとりの学ぶ意欲を高め、確かな学力を定着させます。	学習効果測定を基に児童と面談し、一人ひとりの学習のつまずきや学習方法について、指導する。 算数・数学到達度をステップ学習チェックシートで児童・生徒、保護者に知らせる。	4:対象となる全学級(全教員)で行った。 3:80%以上で行った。 2:60%以上で行った。 1:60%未満であった。	4	返却時に教師から指導・助言をしたまた、学習効果測定の結果をもとに業改善を図った。	4: 62% 3: 34% 2: 3% 1: 0%	各学期チェックシートを印刷して保護者に知らせることができた。来年度2学期に3面談がある場合は、面談時に保護者に同じ画面を見せて説明することで印刷のわりにしたい。	A B C D	9 1 0 0	・改善プランの作成なども考えているなど、学習に対して先生方が熱心に工夫して指導されているのだと感じました。 ・児童の理解度が高く評価できます。 ・学習意欲の高さに感心します。 ・イノベーションシートの活用で児童の考える力につながっていると感じます。「理解」「知識や考える力」の習得による「達成感」を感じられるようにし、児童が自らすんで学ぶ姿勢を定着させる取組を続けていただきたいと思います。
			4:学期に2~3回知らせた。 3:学期毎に知らせた。 2:年度間に1回は知らせた。 1:お知らせできなかった。							
			4:対象児童・生徒への出席を全教員が働きかけた。 3:80%以上の教員が働きかけた。 2:60%以上の教員が働きかけた。 1:60%以下の教員が働きかけた。							
			4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上が回答した。 2:60%以上が回答した。 1:60%未満であった。							
		学習補助員等による算数・数学・英語の補習を実施する。 授業改善推進プランを、授業に生かす。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上が回答した。 2:60%以上が回答した。 1:60%未満であった。	4	授業が分かる」「予習の習慣が付いた」「教師の話を集中して聞く」と回答した児童の割合	4: 62% 3: 34% 2: 3% 1: 0%	学習指導講師による算数の補習を計画的に実施している。来年度に向けて、3学期に担任が保護者と連絡を取り、定期的に参加する児童を決めてけるようにする。 改善プランの作成方法について教務から示している。各教科の改善プランに記載した取り組みを意識して指導案や授業を作成するようにしている。	A B C	9 1 0	・改善プランの作成なども考えているなど、学習に対して先生方が熱心に工夫して指導されているのだと感じました。 ・児童の理解度が高く評価できます。 ・学習意欲の高さに感心します。 ・イノベーションシートの活用で児童の考える力につながっていると感じます。「理解」「知識や考える力」の習得による「達成感」を感じられるようにし、児童が自らすんで学ぶ姿勢を定着させる取組を続けていただきたいと思います。
			4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上が回答した。 2:60%以上が回答した。 1:60%未満であった。							
			4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上が回答した。 2:60%以上が回答した。 1:60%未満であった。							
		「習得・探究サイクル」の授業デザインにより単元(題材)構成を工夫し、探究的な学びの質の向上を図る。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上が回答した。 2:60%以上が回答した。 1:60%未満であった。	3	OKJ(教えて考えさせる授業)により、深い理解を伴った習得を目指した。ミニ探究では、獲得した知識や技能を活用して自分課題を選び、追究する活動をしている。					

		教科等横断的な視点で授業を工夫し学習効果を高める。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上が回答した。 2:60%以上が回答した。 1:60%未満であった。	3		どの教科でもイノベーションシートにある言のカードを活用し、今の学習が3つのコンピテンシーの何につながっていくのか意識できるようにしている。		
プラン3 豊かな心の育成	子ども一人ひとりの正義感や自己肯定感、自己有用感などを高めるとともに、自他の命を尊重する心を育成するなど、未来への希望に満ちた豊かな心をはぐくみます。	小中一貫による教育の視点に立った生活指導の充実により、社会のルールや学校のきまりなどを守ろうとする意識を高める。	4:全教員が行った。 3:80%以上の教員が行った。 2:60%以上の教員が行った。 1:60%未満であった。	4	4: 62%	「小中一貫教育の日」を活用して、小学校から徹底しておいてほしいきまりを中学校から聞き取り、自校に取り入れた。今後の成果を見ながら、検討を続ける。	A	9
		道徳教育推進教師を講師とした研修や、国、都及び区の資料を活用した授業等を行う等道徳指導充実のための取組を行う。	4:学期に2~3回(年間6回)以上行った。 3:学期に1回(年間3回)以上行った。 2:年度間に1回以上行った。 1:実施しなかった。	3	3: 28%	道徳授業推進教師が受けた研修内容を職員全体に伝達した。都や区から給付されている教材も活用して授業し、道徳指導充実させる。	B	1
		学校生活調査(メンタルヘルスチェック)の結果よりストレス症状のみられる児童・生徒に対して組織的に対応する。	4:「組織的対応ができた」と全教員が回答した。 3:80%以上の教員が回答した。 2:60%以上の教員が回答した。 1:60%未満であった。	4	2: 6%	学校生活調査の結果を受けて、ストレス状が見られる子どもには、毎回担任が聞き取りをした。また、記録に残し、全教員で有した。今後も継続する。	C	0
		学校いじめ防止基本方針に沿って、いじめの未然防止、早期発見等のための取組を実施する。	4:「組織的対応ができた」と全教員が回答した。 3:80%以上の教員が回答した。 2:60%以上の教員が回答した。 1:60%未満であった。	4	1: 3%	毎学期のいじめに関する授業、いじめアケートと聞き取りを実践した。年2回のいじめ18の項目で教員の啓発を図り、未然防止、早期発見に努めた。	D	0
		問題行動・不登校問題等にかかる児童・生徒に関するケース会議等を実施する。	4:必要な事案に対して必ず会議を実施し、組織的に対応した。 3:必要な事案に対しておおかた会議を実施した。 2:必要な事案に対してあまり会議を実施しなかった。 1:必要な事案に対してほとんど会議を実施せず、組織的な対応をしなかった。	3		不登校傾向や問題行動のある児童については、生活指導夕会を活用して、全校で有した。状況に応じてケース会議を実施したが、不登校支援員の活用など、対応がやや遅れたケースもあった。適宜会議をけるようにし、早期発見、未然防止等に努める。		
		多様な他者と協働することで考えを広げたり深めたりできる場面を意図的・計画的に設定する。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上が回答した。 2:60%以上が回答した。 1:60%未満であった。	4		学習場面におけるグループ活動や異学年交流の時間など、学級、学年を超えた協同場面を計画的に取り入れた。経験を増やし、豊かな心を育てていく。		
プラン4 体力の向上と健康の増進	スポーツに親しむ心の育成や、運動習慣の定着による体力の向上など、生涯にわたって健康増進を図る意識の向上をめざします。	「早寝・早起き・朝ごはん」月間の取組等を通して、児童・生徒や保護者に対し、望ましい生活習慣についての意識啓発を行う。	4:全教員が行った。 3:80%以上の教員が行った。 2:60%以上の教員が行った。 1:60%未満であった。	4	4: 69%	年2回の取り組みでは家庭にも協力を依頼し、日頃の健康な生活習慣について点検した。また、5月と10月の結果を比較し、改善点を生かせるようにした。	A	9
		給食指導及び教科等における指導を通して、食生活の充実・改善をねらいとした「食育」を推進する。	4:全教員が行った。 3:80%以上の教員が行った。 2:60%以上の教員が行った。 1:60%未満であった。	4	3: 20%	毎回、献立の写真を電子黒板に写し食卓の説明や行事食について指導を行った。今後は給食のレシピの掲示の工夫と行事食時の掲示板を充実させていく予定。	B	1
		体育的行事、部活動、休み時間など様々な機会を通して運動習慣の確立を推進する。	4:全教員が行った。 3:80%以上の教員が行った。 2:60%以上の教員が行った。 1:60%未満であった。	4	2: 7%	マラソン月間、縄跳び月間等を設定し、其間を設け全児童が休み時間に運動する会をつくり、運動の習慣化を図った。	C	0
プラン5 魅力ある教	児童・生徒が安全・安心に学校生活を送るために、教員の指導力向上と良	授業公開日の授業評価を、その後の授業改善に生かす。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上の教員が回答した。 2:60%以上の教員が回答した。 1:60%未満であった。	4	4: 59%	保護者からの授業評価について、アンケート結果を校内で共有している。90%近くは肯定的であるが、今後も、授業デザイン・カリキュラムデザインの工夫をしながら日々の授業改善に努めていく。	A	9
		授業改善セミナー等の研修成果を生かし、主任教諭が助言・支援を行う校内研修等を実施しOJTを充実させる。	4:学期に2~3回(年間6回)以上行った。 3:学期に1回(年間3回)以上行った。 2:年度間に1回以上行った。 1:実施しなかった。	4	3: 30%	夏休みにその内容を生かしたOKJを実施し、考案した指導案に対して指導・助言を行っている。また、学年間での授業参観を行い、日々の授業改善に努めている。	B	1

育 環 境 づ くり	真な教育境 境をつくりま す。	校内委員会等を確実に実施し、学校における特別支援教育を推進する。 「OJTパッケージ」を基に組織的なOJTに取り組む。	4:月1回以上行った。 3:学期に2~3回行った。 2:学期1回以上行った。 1:実施しなかった。 4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上の教員が回答した。 2:60%以上の教員が回答した。 1:60%未満であった。	4	1: 2%	月1回以上校内委員会を行い、そこで話し合われた内容について記録を作成し、全教職員に送ることによって支 が必要な児童についての情報共有を行った。今後も校 委員会とともにタスクを活用しながらより迅速な情報共 ることで児童にとってよりよい支援ができるよう努め く。 日常的なジョブトレーニング、教諭だけの勉強会、主幹教諭・主任教諭からのミニ研修、相互授業観察、模擬授業、off-JT報告会、テーマ別研修を行い、定期的にOJTに取り組んだ。特に、教員のみを共有したり解決したりするための話し合いは意見を活発に出し合った。今後も継続する。	C	0
							D	0
プラン6 て学 と校 も・ に家 進庭 め・ る地 域教 育が 一 体 とな う	学校・家庭・ 地域が担う役 割などを明確 にし、地域に 開かれた教 育の実現を 目指します。 また、相互の 連携を深め、 子どもを育て る仕組みを作 ります。	教育目標・学校経営方針・学校評価等の基本情報、児童・生徒の活動情報等をホームページ等で公開及び更新することにより、積極的に情報を発信する。	4:月1回以上更新した。 3:学期に2~3回更新した。 2:学期1回以上更新した。 1:更新しなかった。	4	4: 43%	毎月の学校だより・保健だより・給食献立表の配信、週1~3回の児童の様子の配信で、情報を信している。おたより配信時に通知がくるシステムがないか検討したが、現状では厳しいことが判明。	A	9
			4:毎回情報を提供した。 3:おおむね情報を提供した。 2:あまり情報を提供しなかった。 1:情報を提供しなかった。				B	1
			4:学期に2~3回行った。 3:学期1回以上行った 2:年1回以上行った。 1:実施しなかった。				C	0
							D	0
		学校運営協議会において、児童の変容等の具体的な資料を作成して、評価に必要な学校の情報を適切に提供し、適正な評価を受けるよう努める。	4:月1回以上行った。 3:学期に2~3回行った。 2:年1回以上行った。 1:実施しなかった。	4	3: 46%	児童アンケートや保護者アンケートの回答データをもとに、児童の変容や学校の取り組みがわかるように資料を作成する。		
		学校支援地域本部と連携するなどして、地域力を生かした特色ある教育活動を実践する。	4:月1回以上行った。 3:学期1回以上行った 2:年1回以上行った。 1:実施しなかった。	4	2: 9%	研究も関連し、企業とのコラボ、せせらぎ館等を活用した連携型授業等を今後も充実させていく。		

○「成果評価」は、各校が4段階で定めた成果指標によって行う。

○記入にあたっては、各学校で取り組んでいる自己評価項目に照らし、該当する項目を取りまとめて行う。

○学校関係者評価の「評価」は、A:自己評価は適切である B:自己評価はおおむね適切である C:自己評価は適切ではない D:評価は不可能である の4点について、評価した人数を記載する。